生態園の 30 年

由　良　　浩

千葉県立中央博物館生態園は、中央博物館に隣接して造られた屋外の観察地です。千葉県の生態系がそのまま再現されているような園名ですが、今のところは、千葉県内の代表的な植生の再現が現在進行形で行われていて、できつつある林や草原に、その場所を餌取りや繁殖の場として利用している動物達がいついている状態です。

生態園は大きく分けて、千葉県の代表的な植生を再現している「植物群落園」、江戸時代からため池として利用されてきた「舟田池」、ブナ科などの樹木を展示している区域とともに、生き物を対象とした実験の場を展示している「植物分類園・生態実験園」の 3 つの区域からできています（図１）。ここでは、現在公開されている「植物群落園」を中心に、生態園のこれまでの歩みや思い出などを述べていきたいと思います。

筆者が 1988（昭 63）年に中央博物館に採用されて最初に配属されたのが、生態園担当の部署でした。その当時の生態園は、まだ工事の真っただ中で、作業服姿の造成業者がずらっと並んでいる会議で、資料の準備や配付、または工事現場での立ち合いなどと、博物館の学芸員のイメージとはかけ離れた仕事から始まりました。その後、縁があってか、生態園とかかわり続けてきました。

図１　生態園の平面図

生態園は、もとは国の畜産試験場であった場所に造られました。研究棟とともに牧草地が広がっていて、家畜などが飼われていました。そこを造成し、野鳥観察舎やオリエンテーションハウスの建物や園路、休憩舎等を配置し、千葉県の代表的な樹木の苗が植えられていきました。舟田池の周囲などには、生態園ができる前から存在していた林があり、それらは、そのままの形で残されています。

工事は 1987（昭 62）年に始まり、整備が終わった地区ごとに順次開園し、大規模な工事が終了したのは、1995（平７）年頃です。中央博物館本館がオープンした 1989（平成元年）に、生態園の植物群落園が一般公開されたので、この年を一応、生態園がオープンした年としています。

植栽業者の多くは植木には詳しいものの、野生の木に関しては知識が不足している場合があり、間違った樹木を植えられそうになったことがあります。生態園の職員は、事前に植える木を確認していましたが、その目をかいくぐって、千葉県にない、例えばミズナラやウラジロモミ等が植えられてしまい、後で気が付くことがありました。そういう木は少数でしたので、除去はせず、観察会などで活用しています。

千葉県にある種類とはいえ、県内での調達は難しいことが多く、ほとんどの樹木は県外から持ち込んでの植栽になりました。好ましい事では決してありませんが、このような手法をとったのは、短期間で完成させなければいけなかったからではないかと思います。

樹木を移植する場合は、土をできるだけ残して移植するのが普通です。ただ、そうすることにより、土の中に混じっていた植物や動物もいっしょに移植されることになります。現在千葉県ではまれなミヤコザサが広範囲に生えている区域が生態園にあります。このミヤコザサは、植栽したものではなく、アカマツを移植したときに、根のまわりの土とともに運ばれたものと考えられています。

当初は、植栽した樹木が倒れないように支柱やワイヤー等が樹木に取り付けてあり、自然の林というより植木屋のような情景でした（写真１）。地面は、ほぼ

裸地でしたが、徐々にアカザやセイタカアワダチソウのような草が生え始め、やがてぼうぼうの藪の状態になりました。

草ぼうぼうになると、たいていは除草したくなるものですが、植物生態を専門とする職員の間では、植栽した木が大きくなれば、自然に消えていく可能性が高いから放置しようということになりました。

草を放置してあった理由にはもう一つありました。観察会などの格好の材料になったからです。草それぞれの生態や他の種類との区別点等を、来園者に説明すると、単に雑草と呼んでいた草も、それぞれに名前も個性もあることをわかってくれるようです。

樹木が成長するにつれ、葉が茂るので、木の下はだんだんと暗くなっていきました。すると、あんなに勢いのあった、セイタカアワダチソウ等の草は、徐々に衰え、弱まっていきました。過去の生態園を知っている方が、今の状況を見ると、ずいぶんと林の中の見通しが良くなって驚かれるのではないかと思います。

生態園の管理は、基本放置です。農薬もまかず、肥料もやりません。ただ幸い、植物が全滅するというような事態は発生していません。一度、ハムシの仲間が大発生して、植栽して大きくなったハンノキの葉がほとんど食い尽くされたことがあります。せっかくのハンノキが全滅かと心配されましたが、翌年以降、急速に被害は減り、それ以降ハムシが大発生したことは一度もありませんでした。

おそらく、植物の成長とともに、鳥やハチ等、肉食の動物が集まるようになったからだと思います。そういう面では、生態系が成熟しているものと思われます。

ただ、外来種は、除去しています。比較的手ごわいのが、シュロです。シュロの実は、鳥が食べることによって、種子が広範囲にまかれますし、生存率もいいようです。何もしないとシュロだらけになりそうなので、最小限のシュロを残して除去しています。

写真１　1989 年当時の生態園

明らかな外来種なら、労力さえかければ根絶することができますが、問題なのが、特定の在来種が繁茂したときです。たとえば、今の生態園では、キヅタが広範囲に広がっています。キヅタは暗さに強いらしく、暗い林の地面の上を伸び、やがて木に登り始めて、木全体を覆い尽くすほどになります。

はじめは放置していましたが、このままでは、次々に木がおおわれていきそうなので、ある程度残して切ってはいます。ただ、在来種なので、どの程度残すべきか悩むところです。

最も維持に手間がかかるのが、砂浜の植生を展示している区画です。自然の砂浜には、砂が飛んだり、潮風が吹いたりと、内陸の植物は砂浜に侵入しようとしても淘汰されてしまうような厳しさがありますが、海もなく、風も弱い生態園では、砂場にもどんどんと内陸の植物が生えてきます。それらの内陸の植物は手で除去していますが、既に植栽してある砂浜の植物、ハマヒルガオやコウボウムギ等を残しながらの除草になりますので、時間と手間がかかります。

生態園では、植えたわけではないのに、いろいろな植物が自然と生えてきます。先ほど述べた、外来種は歓迎されませんが、在来種でかつちょっと珍しい植物が出現することがあります。主なものは、キンラン、ギンラン、マヤラン、ウメガサソウ等です。

最後に動物について少し触れたいと思います。

植物は動きませんので、うまく根付けば、千葉県の植物を展示することはできます。ただ、千葉県の動物だからと言って、例えばサルを園内に放しても気に入らなければ、どこかへ行ってしまいます。こちらとしてできるのは、できるだけ野生の動物たちにとって住みやすい場をつくりだすことくらいです。幸い、例えば、哺乳類でいえば、タヌキやウサギ、モグラ等が住み着いています。たくさんの野鳥や昆虫もいます。小型のキツツキであるコゲラは、園内の枯枝に穴をあけて、子育てをしました。夏になると、うるさいくらいにセミが鳴きます。舟田池には、夏になるとたくさんのトンボが飛び交いますし、冬になると水鳥たちが羽を休めにきます。

生態園は、これまでも、またこれからも、時とともに変化していくものと思われます。時々来園していただき、あたたかい目で見守っていただければと思います。

（生態学・環境研究科）